「キレイなもんだ。」
リヴァイの指は顔の隅々まで撫でた。
エレンはリヴァイの意図を測りかね、内心戸惑っていたが、その指が唇に触れたことでその思考も止まった。
「へ、へいちょ…。」
唇を開くと無遠慮にリヴァイの親指が侵入してきた。
そのまま、下歯と顎を持たれ、口を無理やり開かせられる。
「あ、あぉ…。」
「俺がやったキズも全部治ってやがる。」
審問に掛けられたときにリヴァイが折った歯だろうか。
そのキズはとっくの昔に治っていた。
「お前には、どんな痕を残せばいいんだ？」
「は、はい？」
リヴァイの指に力が入る。
「痛っ」
爪が食い込み唇が切れたるじんわりと赤い血が滲む。
「どうせ、これもすぐ治るんだろ？」
リヴァイの顔がエレンにスローモーションで近づく。
リヴァイの舌がエレンのに滲んだ血を舐め取ると、そのキズも消えていた。
まるでリヴァイの舌がエレンの唇を治したかのようだった。
「兵長…。」
まだ近くにあるリヴァイの顔をエレンは伺うが、自分の影でリヴァイがどんな表情をしているのか分からない。
「誰がお前の飼い主かしっかりマーキングしとかねぇとな。」

そのまま、リヴァイの舌がエレンの唇を割り、口腔内に侵入してきた。
「んんっ」
エレンが事態を飲み込めずに硬直するが、それを振り払う思考も無い。
そのまま、リヴァイの舌に自分の舌を引きずり出される。
「んんんんっ」
ガリっと舌に歯を立てられる。
二人の口腔に血の味が滲む。
しかし、その血もすぐに止まり、エレンの口腔は何事も無かったかのようにリヴァイの舌に犯される。
そして、リヴァイが舌を引き抜くと、二人の間に透明な糸が引かれた。
「はぁ、はぁ…。へ、へいちょ…。んんっ」
息をすることを忘れていたエレンは息も絶え絶えにリヴァイの方を見ようとした瞬間、リヴァイの指がエレンの舌を捉えた。
舌を引き出し、そのまま爪を立てる。
「んんんっ」
リヴァイの指先がエレンの血で染まる。
舌を開放されると、自分の血がリヴァイの指先を汚していることに気が付く。
「あ、の…。」
何か言わなければいけないと分かっていつつも何も言う事の出来ないエレンはもごもごと声をくぐもらせていると。
「舐めろ。」

リヴァイは冷たく言い放った。
今、自分でエレンの舌に爪を立てたせいで血に汚れた自分の指先をエレンに突き出した。
「ほら、舐めろ。」
エレンの唇の前に差し出すと、エレンはもうキズの治った舌でその血を舐めとった。
だが、リヴァイはエレンの方を見ているようでその先を見ているような、そんな目をしていた。
「どうすれば、残るんだ？」
「え？」
リヴァイがぼそりと呟いた言葉がエレンには聞き取れなかった。
エレンが何と言ったか聞こうとした瞬間、リヴァイの手がエレンの股間に伸びた。
「ひっ」
急所をいきなり掴まれ、エレンの体は跳ねた。
「何だ？硬化し始めてるな。」
「うう…。」
エレンのその部分はリヴァイの言うとおり、硬化を始めていた。
「興奮したか？変態？」
リヴァイはエレンのベルトを引き抜いた。
そのままズボンと下着を引き摺り下ろし、若い肉茎を引き出した。
「全然使われてねぇみたいだな。」
リヴァイはエレンの肉茎を持ったままベットに引き倒した。
急所をこうもしっかり握りこまれていてはエレンに逆らう力はない。
いや、そもそも、リヴァイに対して逆らう力など、始めから持ち合わせていない。
仰向けに寝転がされ、膝を立てられる。
これで肉茎だけでなく、奥まった窄まりもリヴァイの元に曝すことになる。
だが、暗いランプの元では、その部分がよく見えない。
「よく、見えねぇな。」
そう言って、リヴァイは机の上に置いてあるランプを持って、エレンの股間を照らした。
「へっ、兵長っ。やめて、くださいっ」
エレンが始めて拒絶を口にするが、言うだけだ。
「エレン。お前は俺に爪立てられて、噛まれて興奮してたドMの変態だろ？それを棚に上げて何言ってんだ？」
リヴァイの言うとおりだ。自分は変態だ。
「ほら、ドMの変態。足、自分で持って拡げて見せろ。」
リヴァイは椅子にドカッと座ると足を組んだ。
そして、片足でエレンの足を突付いて促す。
エレンは言われたとおり、自らの足を抱え、恥ずかしい部分をリヴァイの前に曝した。
「キレイなもんだな。お前、あの幼馴染とできてんじゃないのか？」
「ミカサのことですか？できてなんていません。ミカサは、家族です。」
ミカサが自分の事をどう思っているかは分からないが少なくとも自分は家族だと思っている。
「ふぅん。」